茨城大学教育実践研究 37(2018)，315-326

学社連携による郷土教育の実践

―― 水戸市立千波小学校制作「千波かるた」の事例 ――

佐 藤　環*

(2018 年 10 月 24 日受理)

Educational Characteristics of the SENBA Karuta which SENBA Elementary School and Local Community Made

Tamaki SATO

キーワード：学社連携，千波かるた，郷土教育

本稿の目的は，学社連携による郷土教育の実践例として水戸市立千波小学校，千波公民館（現：千波市民センター）及び地域住民が共同して制作した「千波かるた」を取りあげ，それを活用した郷土教育の実践を明らかにすることである。千波かるたは，1989 年に学社連携事業の一環として制作され，現在も水戸市立千波小学校の教育活動に教材として活用されており，大いなる成果をあげている。1989 年が水戸市市制施行 100 周年と千波小学校創立 15 周年に当たっており，それを記念して千波かるたは千波公民館と千波小学校が共同して制作にあたることになった。千波かるたの内容は，千波地区の歴史や現状に詳しい地域住民が地域代表者として積極的な協力を行ったため完成度の高い仕上がりとなっていたが，現在では実情と異なるものも混在している。郷土教育としての千波かるた大会は，千波地区の子ども会が中心として開催していたが，子ども会が平成 10 年代より活動を休止するものが増加したため，水戸市地区会である「故郷千波を創る会」が子ども会に代わって千波かるた大会を開催することとなった。また，千波小学校では第 3 学年の総合学習である「水戸まごころタイム」にて，「千波かるたを語る会」が出前授業を行い，千波かるたを利用した郷土教育を行っている。

はじめに

社会の教育的基盤が未整備あった時代において，学校は地域の文化拠点であり集会所などの役割を担っていた。それが学校教育と社会教育との分業が進み，社会の教育的諸条件が向上するに連れて学校は地域社会から独立し閉鎖的となった。昭和 40 年代後半まで学校開放は遅々として進まなかったため，1971（昭和 46）年の社会教育審議会答申「急激な社会構造の変化に対処する社会教

*茨城大学教育学部(College of Education，Ibaraki University，Mito，Japan).

育のあり方について」，1981（昭和 56）年の中央教育審議会答申「生涯教育について」，1986（昭和 61）年の臨時教育審議会答申が生涯教育の重要性を指摘し，教育資源の体系化を主張したことで学社連携が進展し始め，また 2001（平成 13）年 7 月の学校教育法一部改正で小学校（31 条），中学校（49 条），高等学校（62 条）において「体験的な学習活動，特にボランティア活動など社会奉仕体験活動，自然体験活動その他の体験活動の充実に努めるものとする。この場合において，社会教育関係団体その他の関係団体及び関係機関との連携に十分配慮しなければならない。」（下線部筆者）とした。

1990 年代より政府が「開かれた学校」という教育政策を推進し，学校教育と社会教育それぞれの分野の守備範囲を明らかにしつつ，同時に相互に協力・補完する各種の実践がなされた。連携の領域は，①連絡調整と情報交換，②教育の内容・方法上の共通課題に対する協力と共同，③学校教員の社会教育での活用，④社会の人的資源の学校教育での活用，⑤学校教育および社会教育の施設の共同利用，の 5 つが指摘されている [(1)]。

本稿では，学社連携の成果として水戸市立千波小学校，千波公民館（現：千波市民センター）及び地域住民が共同して制作した「千波かるた」を取りあげ，その作成過程，内容の特色，かるたを利用した郷土教育実践を明らかにすることを目的とする。

学社連携により生まれた千波かるた

①千波かるた作成の端緒

1989（平成元）年が水戸市市制施行 100 周年，そして水戸市立千波小学校も創立 15 周年を迎えるため，それを記念して千波かるたが制作された。なお水戸市では 2018（平成 30）年時点で，水戸市市制 90 周年を記念して水戸市教育委員会制作「水戸郷土かるた」（1979 年，1994 年改訂），水戸市立城東小学校制作「城東昔かるた」（2005 年）が確認できる。

千波かるた制作の直接的契機は，水戸市制施行百周年記念事業の主体であった当時の水戸市長佐川一信により地域（学区）イベント実施に対して補助金 100 万円がつけられたことによる。

当時は「開かれた学校」志向が強まっており，学校教育と社会教育とが協働する学社連携の在り方が模索されていた。社会教育施設である千波公民館（2010 年 4 月より「千波市民センター」となる）はこの記念事業遂行にあたり千波地区実行委員長に菊池親雄を任じ，また井上明千波小学校長の協力を得ることができたことにより，児童会行事として位置づけ千波小学校独自のかるた制作を企図したのである。しかし，教員の支援があるとは言え児童のみではかるた制作が覚束無いため，児童の保護者をはじめとする地域住民の力を結集して制作に当たることとした。

②千波かるた制作の体制

千波小学校における千波かるた制作の発端は，1987（昭和 62）年 7 月，千波小学校児童会の「千波かるたをつくろう」との発案であった。そこから約 1 年半で，かるたを完成させるに至る。

かるたづくりには，児童，教職員，地域住民が携わることとした。そのためそれら三者が千波かるた制作に関わった。

まず千波小学校の児童は，「読み札」の文章作成及びクラスごとに選定する作業を行い，また「絵

表１　　百周年イベントの運営について

	イベント名	時間	場所	運営の仕方	責任者	係員	仕事の内容
5月	千波小学校15周年式典	9：00〜11：00	校庭・体育館	千波小学校が企画・運営。教育長参加。			
27日	地域イベント開始のセレモニー	11：00〜13：00	体育館	実行委員会の総務が企画・運営。	小宅美好	総務委員	
	昼食			焼きそば2台・約1000食（午後のイベントに参加する子どものため）○テント1	群司敏雄・小室東和	20名	焼く、つめる、運搬、販売
	ジュース（紙パック）	11：00〜	校庭	1200個（昼食・ウオークラリー到着後にも必要）○テント1	山本一雄	5名	販売
	ポップコーン			用具1台リース（12000円）、材料3人分110円、電源〜発電機（小室）、前日に大部分を千波公民館で作る・当日は雰囲気を出す程度の量を焼く○テント1	政井昭弘	5人（全日）、5人（当日）	作る、売る
	千波カルタ史蹟めぐりウオークラリー	13：00〜15：00	校庭出発〜コー	5月6日に申込書を依頼－市政協力委員、天満宮をコースに入れる（持ち出しが不可能と思われるため）	諏訪一弥・総務連絡担当：三上	30名	ポイント係り
	三世代ゲートボール	15：00〜17：00	校庭	コート4面、自由参加	飯田正介・三上光曦	15名	審判・記録
5月	神輿の展示	9：30〜16：00	校庭	展示神楽－素鳶神社・千波神社、当日搬出、テント1。神社名・制作年等の立て札。特別な飾り付けはしない。	石川豊一・石井忠男・綿引（ママ）		
28日	千波カルタ大会	9：30〜11：00	体育館	水戸市民運動会の16ブロック。	稲毛豊昭・加藤三和子	32名・出場ブロック2名	読み手・審判・記録
				○Aブロック（小1〜3年）とお爺さんまたはお婆さん、父・母1名含む			
				○Bブロック（小4〜6年）			
				チーム編成はAブロックと同じ。各ブロック4チームまで参加可能。			
				三世代が出来ない場合は児童だけでもよい。			
	千波小金管バンド・千波太鼓・幼稚園演奏	11：00〜12：00		小学校・幼稚園・太鼓と打ち合わせ	稲毛豊昭		
	バザー	12：00〜16：00	校庭	○5月6日実行委員会で市政協力委員に依頼	大岩信之・緑川久恵	61名（子ども会：16名、PTA：15名、婦人会）	
				○市政協力委員宅に集め→連絡→集める→学校に運ぶ			
				○品物を寄付される方に購入した場合の大凡の値段を鉛筆で記入依頼			
				○テント7張り－サイドの覆いのあるもの			
	仮装行列	13：00〜13：30		○運動会ブロックで参加	山本一雄・政井昭弘		
				○5月6日参加申込を市政協力委員に依頼			
				○参加補助　15,000円			
				○着替え教室			
	模擬店	11：30〜13：00		○餅つき〜持ち帰り用にビニール袋に入れて販売	亀山決・群司敏雄	10名（婦人会）	その他の出店は業者に委託
				○豚汁			
				○テント1張り			
	芸能発表	13：30〜15：30	体育館	5月6日申込書を市政協力委員に依頼	後藤昇・志村和子		
	綱引き	15：30〜	校庭	参加者全員	小室東和・坂本紀興		

その他
○27日テントの数　4張り（本部1、模擬店3）　28日テントの数　10張り（本部1、模擬店2、バザー7）
○参加賞　イベント参加者　暖簾（大人）、ハンカチ（子ども）

表２　　水戸市市制 100 周年記念事業

地域イベントの実施補助金決算書

自平成元年 5 月 27 日　至平成元年 5 月 28 日

1. 収入の部　　（単位　　円）

科目	決算額	内訳
補助金	927,000	
売上金	371,690	バザー，模擬店
協賛金	200,000	市政協，実践会
雑収入	57,000	祝金
計	1,555,690	

2．支出の部　　（単位　　円）

科目	決算額	内訳
報償費	325,000	千波かるた助成　300,000
		アトラクション謝礼　25,000
需用費	1,141,690	
消耗品費	673,512	参加費　372,000
		模擬店用地　301512
印刷製本費	22,150	チラシ　22150
食糧費	346,671	弁当代　227265
		大会賄い料 119406
燃料費	4,820	ガソリン代　4820
事務費	94,537	ワープロ代，コピー用紙代
役務費	69,000	
通信運搬費	19,000	19,000
広告料	50,000	50,000
保険料		
委託費		
使用料及び賃借料	20,000	みこし賃借料　20000
備品購入費		
計	1,555,690	

収入額　1,555,690 円　支出額 1,555,690 円　差引残高　0 円

札」作成を学年やクラスで分担し，現場に赴いてスケッチし原画を作成する。当然，教員の支援を伴うが，かるた制作の主体はあくまでも児童である。

次に，教職員は児童の支援・指導を行うほか，校内選定委員会を組織してかるた制作の運営・管理を行う。

そして，地域の歴史や現状を把握している「地域代表」は，その知見に基づき作品選定やかるた札の解説文作成に関与して質の保持向上を図る。

③水戸市市制施行 100 周年及び千波小学校幼稚園創立 15 周年の事業と千波かるたの完成

1989（平成元）年 5 月 27 日，水戸市立千波小学校・幼稚園では水戸市制 100 周年千波地区実行委員会とともに「創立 15 周年記念」と「市制 100 周年記念イベント」の催し物を挙行した。その折り，千波かるたのお披露目とかるた大会が行われている。

「創立 15 周年記念」式典は二部構成となっており，第一部は千波小学校校庭にて「未来へはばたけ千波小」と題した記念集会で，はじめのことば，児童代表の話，校歌斉唱，初代校長の話，薬玉割りと呼び掛け，千波の輪（ダンス）から「ジンギスカン」（ダンス），校長の話，未来の千波小

（作文・絵・タイムカプセルの紹介），風見鶏の紹介と PTA 会長の話，おわりのことば，夢をのせて（風船を飛ばす場面），であった。第二部は千波小学校体育館にて記念式典を開催しており，その内容は，開式のことば，国歌斉唱，来賓祝辞（水戸市教育長）・来賓紹介・祝電披露，創立 15 年のあゆみ，千波かるたの発表，閉式のことば，であった。

「水戸市制 100 周年記念千波地区イベント」では，「水と緑・伝統をつなぐ千波の輪」をキャッチフレーズとして採用 (2) した催し物（小雨決行）を 5 月 27 日・同 28 日に行っている。第 1 日目（5 月 27 日）には史跡巡りのウオークラリー（午後 1：00〜3：00），三世代ゲートボール大会（午後 3：00〜5：00），第 2 日目（5 月 28 日）には三世代千波かるた大会（午前 9：30〜11：00），千波小学校金管バンド・千波太鼓（午前 11：00〜12：00），仮装行列（午後 1：00〜1：30），芸能発表大会（午後 1：30〜3：30），つなひき大会（午後 3：30〜4：00）があり，両日参加の模擬店や第 2 日目のみではあるが野菜や手芸品中心のバザーなど゛開催され，地域住民が参加できる体制を整えていた。2 日にわたるこのイベントの参加者は延べ 5000 人を数え，大盛況であったと言える。

千波かるたの内容

概して千波かるたで取り上げられた旧跡に関するものは，出来映えの程度が高い。例えば「お」の札では「追鳥狩（おいとりがり）」という歴史用語が採用されているが，追鳥狩とは江戸時代の軍事演習を示すもので高等学校までの歴史教育では採用されてはいない専門用語である。完成度の高いかるたに仕上がったのは，千波地区の歴史や現状に詳しい地域の住民が地域代表者として千波かるた制作に積極的な協力をしたためであろう。

千波かるた制作は，まず読み札を完成させたのち，絵札作成に進むというものであった。

①読み札の作成

1987（昭和 62）年 7 月より千波小学校児童会より「千波かるた」制作の発案があり，夏休み後の 9 月から 1988（昭和 63）年 7 月にかけて，かるた選定委員会は小学校の各クラスが作成した読み札の選定・整理，地域代表との三次にわたる意見調整を行い読み札の原文を確定した。最初に公募した時には，「を」や「る」ではじまる読み札が集まらず，1988（昭和 63）年 2 月に再公募している (3)。なお，旧仮名遣いの「ゐ」と「ゑ」は除いて，計 46 枚の構成となった。これら読み札の特色は，以下の通りである。

第 1 点。千波学区の郷土かるたであるため当然であるが，「千波湖」，「千波公園」など，「千波」の文言が入った札が 16 枚あること。

第 2 点。群馬県伊勢崎出身で旧制茨城県立水戸中学校（現茨城県立水戸第一高等学校）に学んだ小説家・作詞家である群司次郎正（ぐんじじろうまさ）（1905-1973）の小説作品『侍ニッポン』に登場する井伊掃部頭直弼の庶子である新納鶴千代の墓が千波学区内の曹洞宗円通寺に存在したとする住民からの情報により，「う」の札に新納鶴千代を取り上げた。なお，円通寺住職によると，現在，新納鶴千代の墓は存在しないとの由。

第 3 点。「な」の札にある「七沢」は福沢や払沢など，「沢」のつく 7 村の総称で，千波学区は水の豊かな土地柄であったことを示す。

表３　「千波かるた」読み札

文字	読み札	文字	読み札
い	いつの日も　やさしく見守る　黄門像	う	うたにあり　新納鶴千代　円通寺の鐘
ろ	朗々と　吟じて広めよ　千波八景	の	のびゆく千波に　人々集う　市民会館
は	春の千波小通り　桜のアーチ	お	追鳥狩りの本陣　千波原
に	にぎやかに　千波太鼓で盆踊り	く	くらくら坂　今は変わりて　広くなり
ほ	蛍飛ぶ　水と緑の　笠原水源	や	野外ステージ　緑の森に　ハーモニー
へ	勉強も　スポーツもがんばる　千波の子	ま	守ろう史跡　吉田古墳
と	とってもおいしい　千波の梨　今も継がれる	け	軽快に　ペダルを踏んで　サイクリングロード
ち	チビッ子の　歓声あふれる　少年の森	ふ	舟付の　地名を残す　舟場跡
り	理想郷　みんなでつくろう　われらの学区	こ	木もれ日あふれる　素鵞神社
ぬ	ぬきつぬかれつ　千波湖マラソン	え	駅南に　政治の中心　水戸市役所
る	るり色の　甍も光る　美術館	て	出初式　千波湖水を　七色に
を	その昔　家塾を語る　カツラの木	あ	アカシヤの　花がこぼれる　七曲がり
わ	渡し舟　今は変わりて　千波大橋	さ	三世代　みんなで交流　千波のやさしさ
か	開拓の　汗で築いた　千波台	き	急な階段　小さな社の　水戸神社
よ	夜空を彩る　湖畔の花火	ゆ	夕暮れの　湖面に映る　水戸の街
た	尋ねられ　笑顔で指さす　水道タンク	め	メルヘンの　歌が生まれる　桜川
れ	烈公の　お茶を作った　御茶園台地	み	右左　緑が繁る　どんぶり坂
そ	空高く　芸術の香り　文化センター	し	市民が憩う　心のふるさと　千波公園
つ	彝のアトリエ　永久に伝えよ　絵の大家	ひ	日吉神社　背にして楽し　幼稚園
ね	ねんごろに　まつる払沢の地蔵尊	も	もどってこい　逆川に　えびやふな
な	七沢の　水もかれずに　滝の音	せ	千波原　広き大地に　オニヤンマ
ら	ラケットが　きらりと光る　湖畔のコート	す	住む人の　心をなごます　千波の四季
む	群れ遊ぶ　水鳥の楽園　千波湖	ん	みんなで守ろう　保存林

②絵札の作成と千波かるたの完成

読み札が確定してから，1988 年 7 月に絵札の公募を行い，同年 9 月に千波かるた絵札展を千波小学校体育館にて行った。さらに同年 10 月から 11 月にかけて絵札完成を目途として教員研修（題目：「絵札作成について」）を行うとともに，千波小学校児童に対して，読み札で取り上げられた場所を学年・学級に割り当て，「写生大会」の名目で児童が赴いて原画となるスケッチを行った。そして，千波小学校教員が最終的に手を入れて絵札原画の完成度を高めた。なお，千波小学校教職員及び児童を千波かるた制作に導けたのは，当時の井上明千波小学校校長の理解・熱意に負うこと大であったと言う。

1989 年 1 月に選定委員会により川田プリント（水戸市上水戸）へ印刷依頼し，同年 3 月に印刷が完了した。費用は 30 万円。

表４　千波カルタの作成　　（水戸市立千波小学校）

年	月	出　来　事
昭和62	7	千波小学校児童会からの提案「千波カルタをつくろう」
	7～9	読み札の作成
	9	クラス代表作品の選定
	11	児童会作成カルタの整理
	12	「千波カルタ」募集要項配布（全家庭）
昭和63	1	作品募集の締切
	2	作品再募集（46枚のうち17枚の文字について）
	5	校内一次選定（374点）
	6	地域代表による二次選定
		校内選定委員会の開催
	7	地域代表による三次選定、読み札46枚の原文ができる
		校内選定委員会の開催開催
		特別委員による補正
		読み札の完成
		「絵札」募集要項配布
	9	絵札募集の締切
		千波カルタ絵札展を千波小学校体育館にて開催
	10	校内絵札選定委員の選出
	10～11	職員研修　題目：絵札作成について
		絵札制作週間（学年、クラス分担）
		・現場でスケッチ
	11	・原画完成
	12	印刷原画完成
		・原画コピー、カッティング、着彩
		千波カルタで取り上げた項目所在地の解説を作成（5頁→1.5頁）
平成元	1	校内選定委員会、印刷所（川田プリント）へ
	2	地域代表による選定委員会
	3	印刷完了、各家庭・関係機関等へ順次配布
	5	千波カルタ発表会、水戸市制百周年記念イベント実施

参照：村上武夫「平成26年度地域リーダー研修会発表要項－歴史に学ぶこれからの地域づくり－　千波の宝物」

③作成当時と現在（2018 年）との対比

千波かるたが作成された 1989 年当時と比べて現在（2018 年 9 月）では，約 30 年の歳月が流れ環境が大きく変わってしまい，現状にそぐわない札も出てきた。

「も」の札にある「もどってこい，逆川に，えびやふな」に関しては逆川の水質が頓に向上してエビ・フナが泳ぐようになっている。

「は」の札にある「春の千波小通り，桜のアーチ」にある桜通りの桜木は茨城県庁が笠原町に移転した頃より混雑・渋滞緩和のため道幅拡張が計画され，それに基づき 2016（平成 28）年夏に行われた千波小学校通りの道幅拡張工事により，立派な桜木群は伐採されてしまい“桜のアーチ”は存在しなくなった。

水神橋より逆川を望む（2018 年 9 月 14 日，著者撮影）

絵札「も」

現在の千波小学校横の桜通り（2018 年 9 月 14 日，著者撮影）

絵札「は」

「を」の札には「その昔，家塾を語る，カツラの木」とある。「“千波かるた”項目所在地，解説」に「家塾は，初等教育機関としての私塾のことをいう。この家塾跡は，現在の上本郷にあり，カツラの大木が，今もなお残っており，当時を偲ぶことができる。」とあるが，2015 年頃に土地所有者がアパートにするため伐採したので，現在はそのカツラの木は存在しない[(4)]。なお，水戸藩学制で言うところの「家塾」は，「諸士已上（いじょう）子弟」が 10 歳になれば必ず入学して句読などを教育する学舎で，15 歳時に素読修了程度の試験で論語・孝経等の理解が認められた場合，水戸藩校弘道館講習寮に昇ることが認められるという公的な教育機関であった[(5)]。当時の千波地区は武家居住地ではないので，水戸藩諸士子弟の初等教育を担った「家塾」を指したのではなく，私塾，寺子屋などと称せられる私人が開設した民間教育機関の意味であろう。

千波かるたを利用した郷土教育の実践

①かるた大会を支えた子ども会

1989 年 5 月 28 日の「水戸市制 100 周年記念千波地区イベント」において三世代千波かるた大会が挙行されて以降，千波小学校体育館での千波かるたを利用した大会は，主として千波学区の子ども会が中心となって開催し，2018 年 1 月 27 日の千波郷土かるた大会を以て子ども会主体の開催形態は終了する。

しかし，子ども会の活力は平成 10 年代ころより徐々に衰微し，活動を休止するところが多くなっていった。2017（平成 29）年に 6 団あった子ども会のうち，上本郷・つくし・西組の 3 団が 2017 年度末に休止となり，2018（平成 30）年度末に福沢の休止が決定している。残りの下本郷・払沢の 2 団も数世帯しか加入していない状況である。その理由を平成 29 年度千波上本郷子ども会育成会会長の潤間紀久子氏は「子どもが少なくなったからではなく，加入しなくなったこと」であるとし，子どもが塾や少年団などの習い事で忙しく活動が多様化したことと保護者も仕事で忙しいということなどが原因と説明されるが，それは疑わしいと指摘する [6]。

千波小学校かるた大会（2008 年 1 月 20 日，著者撮影）

②水戸市地区会「故郷千波を創る会」の活動

2017 年度で子ども会育成連合会が主催した千波郷土かるた大会は終了したが，それに代わって地区会「故郷千波を創る会」（会長：蔀彰男，事務所：千波市民センター）がそれを引き継いで 2018

年 12 月 1 日に千波小学校全児童を対象に第 1 回千波郷土かるた大会を行う予定である。実施形態は，千波小学校の学年・学級で代表者を決めて大会を行うというものであり，子ども会に代わって「故郷千波を創る会」と千波小学校との学社連携である。

③「総合的な学習の時間」の利用

千波小学校では，3 年次に配当されている「水戸まごころタイム」と称する総合学習の時間に，千波かるたを利用した指導を展開している。「千波かるたを語る会」が出前授業を行い，児童の気に入ったかるた（読み札・絵札とも）を写すことや，かるたの説明文を書くことなどを通じて，郷土への関心・愛着を醸成しようとする取り組みがなされている [(7)]。

④その他

千波かるたを利用した郷土教育により，児童が地域をより深く知ることは勿論，児童の保護者も同様に地域を知る契機を提供している。特に，他所より千波学区に来た保護者にとって地域を知ることができた重要な実践であったと評価されているとの由 [(8)]。

また，2018 年 7 月 17 日から 7 月 29 日にかけて茨城大学図書館 2018 年前期企画展「合戦，騒乱，そして軍隊」（於：茨城大学図書館本館 1 階展示室）にて千波かるたの「追鳥狩」絵札・読み札が展示された。

千波かるた「追鳥狩」の展示（2018 年 7 月 25 日，著者撮影）

結語

「千波かるた」は，1989 年に学社連携事業の一環として制作され，現在も水戸市立千波小学校の教育活動に活用され，大いなる成果をあげている。

制作を企図したのは 1989 年が水戸市市制施行 100 周年と千波小学校創立 15 周年に当たっており，当時の佐川一信水戸市長が地域イベントに補助金をつけたことが端緒であった。それを受け，社会教育を担う千波公民館と千波小学校が共同して制作にあたることになった。1987 年に千波小学校児童会の発議という形式をとり，児童主体ではあるが教員と地域住民が支援する体制を整えた。そして，1989 年 5 月に千波小学校創立 15 周年記念式典にて千波かるたがお披露目され，また水戸市制 100 周年記念千波地区イベントで三世代千波かるた大会が行われた。

千波かるたの内容は，千波地区の歴史や現状に詳しい地域住民が地域代表者として積極的な協力を行ったため完成度の高い仕上がりとなった。しかし，制作当時から約 30 年を経た現在（2018 年）では環境が大きく異なってしまい，千波かるたの絵札・読み札に示された内容がずれてしまっているものもある。これについては，補正することを視野に入れるという方法もあるが，他方，千波地区の現在と過去を比較する教材となっていると捉え，敢えて補正をしないという選択もある。

郷土教育実践としての千波かるた大会は，1989 年以降，千波地区の子ども会が中心として開催していた。しかし学区内の子ども会は平成 10 年代より活動を休止するものが増加し，2017 年度を以て子ども会主体のかるた大会という形式が終了した。2018 年度より水戸市地区会である「故郷千波を創る会」が子ども会に代わって千波かるた大会を開催することとなった。また，千波小学校では第 3 学年の総合学習である「水戸まごころタイム」にて，「千波かるたを語る会」が出前授業を行い，千波かるたを利用した郷土教育を行っている。

謝辞

本稿執筆にあたり，水戸市立千波小学校より「千波かるた」のご恵贈に預かった（2018 年 6 月 1 日）。また，水戸市社会福祉協議会千波支部長の村上武夫様（千波かるた制作当時の水戸市立千波小学校教頭）より，千波かるた制作に関するお話のみならず，資料をも貸して戴いた（2018 年 7 月 31 日，於：千波市民センター）。茲に記して，深謝申し上げます。

注

(1) 細谷俊夫ほか『新教育学大事典』第 1 巻，1990 年，348 頁。

(2) 現在でもこのキャッチフレーズを使用しており，30 年近く利用されている（村上武夫「平成 26 年度地域リーダー研修会発表要項　千波の宝物」）。

(3) 読売新聞，1989 年 5 月 16 日。

(4) 2018 年 9 月 7 日，蔀彰男様御内室への電話による聞き取り。土地所有者は「市毛」様との由。

(5) 文部省編『日本教育史資料』一巻，臨川書店（復刻），1970 年。349-351 頁。

(6)　千波上本郷子ども会「子ども会だより」最終号，2018 年 3 月 31 日。

(7)　前掲「平成 26 年度地域リーダー研修会発表要項　千波の宝物」所収「千波かるたを語る会の教育活動個別計画」。

(8)　村上武夫様へのインタビューによる（2018 年 7 月 31 日，於：千波市民センター）。